

データサイエンスで、量と質を改善。 誰かのためではなく"未来"のために

千葉県市原市で半世紀以上、家族経営で乳牛を育ててきた岡田牧場。搾乳頭数は50頭ほどの酪農場だが、直近1年で1頭あたり1300kgも乳量を増やし、乳質も上げた。その裏には、明確なビジョンと、したたかなデータ活用があった。

100年前の小学校校舎を 牛を育てる牛舎に活用

千葉県のほぼ中央にあたる市原市。市内の天羽田という地域の高台に、「岡田牧場」はある。
創業は1968年。野菜や水田とともに牛を扱う複合農家だったが、すぐに乳牛専業となった。
今は搾乳頭数50頭、全部で80頭前後の牛を飼育。それを3代目の岡田秀明さん、代表である篤信さん、叔父の3名を中心に切り盛りしている。
一見すると典型的な家族経営の酪農場だ。
しかし同時に、いくつか他と違う特徴も際立つ。
まず「外観」。三角屋根の木造のタイストール牛舎は、創業間もなく、小学校校舎を移築したものだ。
「もともと100年ほど前の大正時代に作られた瓦と木材の建物です。牛舎としては古くて驚かれますが、最近の自然災害にも耐えていますよ」（岡田さん）

そういう岡田さんの格好も特徴的。ヴィンテージ風のネルシャツに厚いダック地のワークパンツ姿と、実にスタイリッシュだ。「アメリカンカンパジュアルな服が好きで。もともとワークウェアで頑丈ですし、同じ仕事もはかどる気がします」（笑）
もともと、岡田牧場が最も特徴的なのは、見た目だけではない「内実」にこそある。

実は近年、右肩上がりです。乳量と乳質が向上している。1頭あたりの乳量の年間成績は、昨年10月に8361kgだったのが、毎月100kgずつ着実に増加。今年3月には9000kgを超え、9月には9725kgにまで達しているのだ。

「餌の効果もありますが、昨年から始めたバルク乳細菌検査も大きな要因ですね。ただ一番大きい理由はもう1つあって……」と岡田さんは続ける。
「未来のビジョンが見えた事なんです」

分かっていてもやらないのは 実は真に分かっていないからだ

今年50歳になった岡田さんが牧場を継いだのは1999年、30歳になる直前だった。
それ以前は、畜産学科のある大学へ進学、在学中に1年間休学して米国ウイスコンシン州の酪農場で研修を受けた。その後、飼料メーカーに就職。営業職を29歳まで務めていた。
「米国での研修は衝撃でした。『米国人は酪農も

岡田牧場



千葉県市原市天羽田1452
家族経営／6名
飼養頭数／80頭（うち搾乳牛50頭）

岡田牧場三代目の岡田秀明さん（前列右から2人目）と奥様の里美さん（前列左から2人目）、代表の篤信さん（前列左から3人目）と母親のせい子さん（前列右端）、叔父の秀徳さん（前列左端）と関係者の皆さん



陽気に楽しくやっているに違いない』と夢を見て行ったのに、僕ら研修生をめちゃくちゃ働かせる事で成り立たせていた。自分が手がける牧場では絶対にそんなスタイルは嫌だと強く思いました」

そのため、牧場を継ぐ際に2つの取り組みを試みた。1つは「牛群検定」だ。月に1度、搾乳した乳を検定組合に出し、量と成分を数値で表して、質と量の変化を測った。先代の父は暗黙知で行ってきたが、それを数字で見取れるようにした。

「サラリーマン時代、実業家である土光敏夫さんの『分かっているもやらないのは、実は真に分かっていないからだ。やっても成果が出ないのは、実は正しくやっていないからだ』という言葉に出会い、心に残っていました。なぜ乳が出るのか、病気はないか、餌は合っているか。『分かる』ためには、感覚ではなくデータで見ようと考えました」

2つ目は「そのデータに照らし合わせて、丁寧に餌を変えていく」事だった。

就農5年目にはJ A東日本くみあい飼料株式会社に相談して、給餌方法を分離給与からTMR（完全混合飼料）へ変更。コンサルタントの指示を受け、シーブンごとに微調整し、その効果を測定してきた。「効果が数字で見えて、提案も受け入れやすかった」と岡田さんは振り返る。

こうして「データ×積極的な配合調整」スタイルで岡田牧場は堅実経営を続けてきたが、実は2年前までは乳量も乳質も微向上に過ぎなかった。

「牧場を継いだ最初の年、何頭か牛を潰した苦い

「ぐうの音も出なかった。体細胞数が群の平均値で毎回30万以内ならいいだろう、という甘さがありました。早速、その4頭を除外しました」

もっとも2つ目の「一頭一布の徹底」に関しては、「正直、わざと聞き流していた」と明かす。乳量はそこそこ。売上げも今程度でいい。これまでの堅実経営のスタンスは不動だったからだ。

「そういわれてもムリだよ、という思いもありました。全部で6基ある搾乳機を父が1つ、叔父が1つ、残り4基を僕がやっていたんです。4基を1人で管理するとなると『とにかくスピードを上げないと！』とギリギリで作業してましたからね。そのせいで一頭一布を犠牲にしていた。しかも『売上げも満足している。問題ないよ』と思って」

しかし、心変わりする。後押ししたのは、甥っ子の一言だ。

「牧場の仕事、やってみよう」

「岡田牧場も他の農家さんと同じように、後継者がいないという問題がありました。転機は2018年の夏に高1になる姉の次男が牧場を訪れたことです。滞在するうちに自然に手伝うようになり、その過程で牛の仕事をおもしろいと感じてくれた。そして『北海道の学校に行って酪農を学び、この牧場を続けていきたい』といってくれたんです」

突然、承継される未来が見えた。そうすると、「今を変えなくては」とごく自然に思えたという。

『無理して4基を1人で搾れ！』なんて未来を押しつけるわけにはいかない。牛に無理をさせずに



経験があったのです。乳量を出そうとして、無理に搾って、牛の体調まで気がまわらず……。だから牛に無理をさせず、成果はそこそこでいい。僕の牧場経営のモノサシはいつもそこにありました」

しかし、そのモノサシが2020年、変化を遂げた。

**次の世代に「残すべき未来」が見え
自然と変化していった**

最初のきっかけは1年前の7月にスタートした、前出の「バルク乳細菌検査」だ。J A全農が大学と共同で、検査を活用した乳房炎対策の取り組みを開始した。試験的導入エリアとして、岡田牧場が所属する内房地区J A酪農協議会に話が渡った。

乳質や乳量を下げる「乳房炎」には、さまざまな原因があるが、毎月この検査をする事で乳房炎の原因の特定や季節による変動などを把握する事ができる。

検査を継続する事数カ月、岡田牧場のバルク乳は環境性レンサ球菌が多い事が分かった。

そこで大学の先生を含めたチームが牧場を訪れ、「搾乳立会^{りっかい}」を実施。結果を踏まえた「支援会議」で改善のためのアイデアが提案された。

具体的には2つ。まず「4頭の牛が乳房炎を繰り返していて、牛群の数値の足を引っ張っている」。そして牛の数だけ布を用意して乳房を拭く「一頭一布の徹底」だった。

しっかり乳量と乳質を上げ、利益を出すようにしようとポリシーを変えたんです。『牛舎で育てれば教えなくても分かる』みたいな教えも、自分の代で終わらせたくまりました」

支援会議の改善策と改めて向き合った。一頭一布は「使い捨てタオル」を活用して対応。消毒液で洗う手間がなくなった事で、作業スピードが上がり衛生面を改善した。そして乳量のアップに合わせ、飼料の増加もJ A東日本くみあい飼料の担当者に相談。2019年から始めた発酵TMRの給与量を更に増やし、「1つ上」を目指し始める。成功はもちろん数字で見えた。前述のとおり、1年で1頭あたりの年間成績が1300kg以上増えた。乳質も改善され、乳房炎の治療頭数も前年の24頭から7頭へ大幅に減少した。

「今は自動搬送付きの搾乳ユニットの導入準備を進めています。狭いので業者の方から『やりがいがあります』と面倒臭さをほのめかされつつ（笑）。もっと岡田牧場をレベルアップさせていきたい」

岡田牧場は将来を見据えた進化を続けている。米国で夢見た「陽気で楽しく」運営できる牧場は近い将来、市原に生まれるかもしれない。



①牛舎は大正時代に建てられた建物を利用。20年前は地域に22の牧場があったが今は8牧場にまで減ってしまったという ②子牛は自農場で管理 ③タイストール牛舎は校舎を移築して作った ④TMR自動給餌機を採用し、昨年から発酵TMRも使用している。日々給与と飼料の内容を調整し、乳質を上げる ⑤バルク乳細菌検査後の改善策によって乳質や乳量が改善された